

講評

社会福祉法人 恩賜財団済生会 香川県済生会支部長 一井真比古

最後に全体の講評をしろと言うことなのですからけれども、私自身、このような分野の専門家ではないので、的確な講評ができるかどうか分かりません。ついては、私の個人的感想ということでお聞きいただければありがたいと思います。

まず、原先生の研究について述べます。原先生達が開発したプチ CTG は遠隔医療技術の一つでもあり、私はこの大きな成果に対して敬意を表したいと思っています。原先生はこの技術だけでなく、全体の遠隔医療技術について、いろいろな意味でスタートされています。私は以前から「ぜひ、このような技術を世界標準にしていきたい」と、いろいろな場々言ってきました。その意味からも、これら原先生の成果は、それにだんだん近づいて行っているように感じているところです。

ただ、そのためには乗り越えなければならない課題がいろいろとあるようです。今日も話に出ましたようにビジネスという形に持っていくための課題、人材育成の問題など、これらについて、かなりの成果が出ているというように承知をしていますけれども、今後もいろいろな課題が出てくるように思います。それを一つ一つ乗り越えていただいて、私が最初に申し上げましたように、いわゆる世界標準、まさに **made in Kagawa** として大きな技術に育ていただければ、大変ありがたいと思います。原先生達の今後の一層の発展を期待しております。

次に大賀先生の遍路について述べます。大賀先生の講演の質疑応答の際に「ヨーロッパの遍路の道」について申し上げましたように、実は私、現役の時に少し遍路に関わったことがあります。「四国 88ヶ所の遍路道を世界遺産にしよう」と言う動きがありますけれども、世界遺産にするためにはいくつかの課題があります。その課題の一つですが、「四国遍路の道の歴史的価値の証明」ということを行わなければなりません。これは大学の役割だろうということで、この課題をもらったのです。ところが、これがなかなか大変でした。そういう意味で、今日、大賀先生がして下さった話は小豆島の島遍路でしたけれども、四国全体の遍路を世界遺産にするための活動という立場から見た場合、小豆島の島遍路とも歴史的に繋がりを持ってくるように聞こえました。この面からも、今日のお話を大変興味深くうかがった次第です。

このような遍路というものを学生と一緒に行っていただくことは、個人的な感想ですがけれども、大変すばらしいことだと思います。少し極端なお話をいたしますけれども、私は四国遍路や今日お話ししていただいた島遍路を、できれば大学の単位化できないかと、前から思っていました。これは大学全体でご議論いただくことですがけれども、そんなことを考えても良いのではないかと思います。これは現役の時から思っていたことです。

先ほど大賀先生が言われましたけれども、廻ることは単なる宗教的な問題ではなく、大きな意味での人格形成の一つと考えることができます。四国遍路 88 カ所の全てを廻りますと約 1,400km あります。歩けば 1 週間や 2 週間では廻れません。3 カ月ぐらいかかると言われています。これを廻ることによって人格形成に非常に大きな影響を与えることができるだろうということから、先ほど申し上げましたように、なにかそういうものを単位化できれば良いのではないかということを一時期考えたことがあります。こういうことも、これから考えて行っていただければありがたいと思います。

そういう中で、この島遍路について大賀先生に今後ともいろいろな形で関わっていただきたい。また、島遍路だけでなく四国 88 ヶ所遍路も含めて、その活性化に繋がっていくような関り方をしていただければありがたいと思っています。

最後になりましたけれども、多田先生の干潟と藻場の研究について述べます。この研究には多田先生をはじめ一見先生などがずっと以前から関わっておられたことを十分承知しております。

特にこのような藻場や干潟の機能の定量化ということですが、多田先生ご自身も「定性化の議論は前からあったけれども、定量化の議論はあまりなかった」と言っておられましたように、私から見るとこのような定量化の議論や研究は始まったばかりだというような見方もできるのではないかと思います。その意味でも定量化については、これからもどんどん進めていただきたいと思います。今日のお話の中でも、干潟の NP の収支の定量化や底生生物の激減などについて具体的なお話をさせていただきました。そのようなことについて、私自身、理解を深めることができたと思っております。

それから、今日、話に出ましたけれども、藻場や干潟が有機物を無機化して行く、その具体的な評価として、「このくらい下水処理場に匹敵する量が無機化しているのですよ」と言うような表現を、このような場でどんどん使っていただきたい。そうするとリスナーも非常に分かり易い。ぜひ、それをお願いしておきたいと思います。

もう一つは、「瀬戸内圏の干潟生物ハンドブック」という本を出版されています。私はこれも非常にすばらしいと思っています。このような形で地域、特に教育機関との連携にもっともっと取り組んで行っても良いのではないかと思います。こう言うと良くないかも知れませんが、そうすることで大学本部から見た場合の瀬戸内圏研究センターの存在価値をより高く認めてもらうことができます。センターは学部と違う体制ですので、そういう意味でも地域との連携をもっと極端に出しても良いのではないかと感じた次第です。

以上 3 つについて少しずつ申し上げましたけれども、いずれにしましても、この 3 つの研究分野は瀬戸内圏研究センターを作った時からの非常に重要な分野です。社会から見た場合の香川大学の存在価値を高めていくために、これからも瀬戸内圏研究センターは大きな役割を果せるのではないかと思います。今後のますますの発展を期待して、私の講評に代えたいと思います。今日はどうもありがとうございました。